

## 中国の核戦略の変化

漢和防務評論 20120221

平可夫

中国は、最初の核実験を行って以来、如何なる“条件下においても最初に核兵器を使用することはない”と宣言し、これを既定の核戦略として半世紀近く宣伝してきた。しかし1990年代中期以降、核戦略に関する軍内文書には次のように記述されている。「現代のハイテク戦争に対応するため、中国軍内の学者は“核使用の条件”を研究中である」と。

これらの中国軍内文書は、西側国家の中国軍事 WATCHER の間で広く回覧されており、一部の西側学者は、論文の中で何度も「中国は核兵器の先制不使用方法を放棄する可能性がある。その根拠は、これらの内部文書である」と述べている。

“如何なる条件下で核を使用すべきか”の問題に関して、内部論文は、この問題を“核使用のハードルを下げる”ための理論であるとしている。内部論文は、“一旦強敵或いは分裂主義勢力から重大な脅威を受けた場合、中国軍は核使用のハードルを下げる必要がある。その手段には、大規模な核戦争演習、核兵器を使用する前提条件の列挙、核兵器の一般公開等が含まれる”と述べている。

”核使用のハードルを下げること”及び核使用の”新理論”を公開することは、既定の“如何なる時期、如何なる状況下においても最初に核兵器を使用しない”戦略とどこか矛盾するのであろうか？内部論文に詳細な説明はなく、研究が必要と述べているのみである。

過去10年来の台湾海峡問題に対する中国の軍事的対応を見ると、“核兵器使用”は、既に研究・討論の段階ではなく、すでに実際に核兵器が運用されている。1995年、中国海空軍が初めて台湾に対抗する大規模軍事演習を行った際に、中国の CCTV テレビは DF-5 型弾道ミサイルを映し、“点検中の戦略弾道ミサイル”であると説明していた。第二砲兵司令は、英文版の「中国日報」紙上で談話を発表し、中国軍は、如何なる核攻撃に対しても反撃能力があると述べた。實際上、当時米国は中国の核使用に対応していなかった。

”両国論”が提示された後、中国の官側の軍事雑誌は「核条件下の方面軍上陸作戦」、「中性子爆弾は核兵器か」等の多くの紙上討論を掲載し、中性子爆弾は”きれいな爆弾”であり核兵器に属さないなどと論じていた。

これらのことから、中国軍の核使用は、すでに台湾独立阻止、米軍の関与阻

止のための重要対抗手段となった。中国軍は、実戦で本当に核を使用するのだろうか？この方面については、相当あいまいな点がある。確かに如何なる軍内文書にも”最初に核を使用する”とは書かれていない。

中国式哲学に基づけば、”如何なる時期、如何なる状況下においても最初に核兵器を使用しない”とは何を言っているのであろうか？融通のきく解釈ができるようだ。これは、1970年代初期に中国軍内部、民間に広く存在した伝聞情報を思い起こさせる。およそ1971、1972年ごろ、中国の民間及び軍内に、ソ連軍が新疆地区に大挙して侵攻したとの伝聞がもたらされた。実際は、確かに1970年に双方が新疆で衝突し中国軍は1個連隊の兵力を失った。そのときソ連軍は機械化部隊を使用しダマンスキー島（珍宝島）事件の報復を行った。中国側の伝聞情報とは、ソ連軍が大挙して新疆地区に侵攻、中国軍はソ連軍の侵攻を阻止するため原子爆弾を使用し打破したというものであった。同日新華社通信は、中国は国内で原爆実験を行い成功したと報道した。

これは、単なる伝聞に過ぎないが、当時の中国軍人の一部はこのように喧伝した。これは戦略的欺騙であろうか？或いはソ連に対する心理戦であろうか？知る由もない。しかし当時の実際状況を見ると、一旦大規模な中ソ戦争が発生していたら、侵攻するソ連軍に対抗するため中国は原爆実験の名目で、中国国内で核爆発を行ったであろうことを完全に否定することはできない。この伝聞情報は、別の側面から国際関係を受け入れる際の中国式哲学を示している。

真に注意すべきことは、上述の中国軍内文書で大陸間弾道ミサイルの使用方法に対する考え方が変化したことである。第二砲兵の科学技術者は、通常弾頭型大陸間弾道ミサイルを発展させ、強敵（米国を指す）に対抗するため10トン前後の特種弾頭にしたいと提案している。これは大きな実戦的な意味がある。いわゆる特種弾頭とは、大型のガス弾、電磁パルス弾頭等を指す。内部文書は、通常弾頭型大陸間弾道ミサイルを北斗型GPS衛星、高精度誘導技術、及び特種弾頭技術を結合している。

通常弾頭型大陸間弾道ミサイルの考え方は、米軍内部でも長年検討されてきたが未だ実戦配備はされていない。中国は、通常弾頭型大陸間弾道ミサイルを本当に開発しているのだろうか？如何にコストを下げるのだろうか？大陸間弾道ミサイルの高コストと通常弾頭の低効率を如何に考慮したのだろうか？さらに注目する必要がある。